

# 体験と主体的参加を特徴とする統計活用教育

同志社大学文化情報学部 村上 征勝

## 1. 同志社大学文化情報学部の統計教育

文化と人間に関する現象を科学的な方法によって調査し、 $\Sigma$ が初めての学生にも、4年間で問題発見から問題解決まで統計が活用できる能力を身につけさせる

## 2. 統計教育カリキュラムの特色

- ◆ データサイエンス科目として、データ分析科目 14 科目、基礎数理科目 11 科目、情報・コンピュータ科目 18 科目を設置。他に文化クラスター科目 51 科目を設置。
- ◆ 統計の基本的な科目には講義科目に加え演習科目を設置  
「データサイエンス入門」＋「データサイエンス入門演習」  
「データサイエンス基礎」＋「データサイエンス基礎演習」  
「定量的データ分析」＋「定量的データ分析演習」  
「定性的データ分析」＋「定性的データ分析演習」
- ◆ I年次から3年次にかけての体験と主体的参加を特徴とする8つの実験・演習科目9単位
  - a) 「文化情報学入門」、「文化情報学演習1」、「文化情報学演習2」、「文化情報学演習3」、
  - b) 「ジョイント・リサーチⅠ」、「ジョイント・リサーチⅡ」
  - c) 「コロキアム」、「アドバンスト・コロキアム」、と4年次の卒業研究8単位は必修。卒業研究は理系と文系の教員が共同で指導。
- ◆ a) 及びb) では他者の視点を取り入れながら共同作業を行う能力を涵養するため、履修者間でグループを作りジョイントで研究することを必須とする。「ジョイント・リサーチⅠ」、「ジョイント・リサーチⅡ」では16の内容の異なるクラスを設置、履修者はその中から希望するクラスを選択し、5名程度でグループを構成し、各グループでの討議に基づき具体的な研究テーマを設定し、仮説形成、データ生成、仮説検証からなる科学的研究の方法を習得する。各クラスは少なくとも1名以上の文系と理系の教員で指導する。
- ◆ c) は様々な文化体験や卒業研究発表会に参加・討論することにより文化情報学の面白さを理解することが目的。1,2,3年次の学生が同一クラスで学ぶ学年横断型の科目。

## 3. 実施上の問題点、不十分な要因

- ◆ a) 及びb) の必修の実験・演習科目は、複数のクラスに分けて実施するが、クラスによって成績評価に差が出ることを防ぐため、評価基準を統一しておく必要がある。しかし、クラスによって実験・演習内容が異なるため、各教員の指導方法、達成目標を尊重しつつ、どの程度まで評価基準を統一すべきかの兼ね合いが難しい。
- ◆ 「ジョイント・リサーチⅠ」、「ジョイント・リサーチⅡ」では、学生の希望に出来るだけそうため研究内容の異なる16のクラスを設置しているが、理系と文系の教員が少なくとも1名以上という制約の下で、教員をどの様に各クラスに配置するかが問題となる。
- ◆ クラス分けが実験装置の関係で必ずしも学生の希望にそえない場合が生じる。

## 4. 教育効果の判定法

- ◆ 「ジョイント・リサーチ」は、グループごとの成果発表（1～2回）と出席点、各自のレポートで評価。
- ◆ 最終的な教育効果は複数の教員が参加して行う卒業研究の査問会で判定。